特選ブログ
shin1さんの日記
Vol.66

人間牧場主・年輪塾々長
若松　進一

温泉とまちづくり

私たちの小学校では、6年生の修学旅行が別府温泉だったからでしょうか。温泉と言えば日本最大の湧出量を誇る湯けむりで有名な別府温泉を思い浮かべます。たった1泊2日の旅行でしたが観光バスに乗って回る楽天地や地獄めぐりなどは、まるで夢の国へ行ったみたいでした。その時バスガイドさんが愛媛県出身の油屋熊八という人のことを話していたことをおぼろげながら覚えています。その後調べてみると面白いことが分かりました。

別府温泉の父「油屋熊八」

油屋熊八は米問屋の長男として宇和島市に産まれました。27歳で宇和島町議に当選、30歳で大阪に出て米相場で富を築き別名油屋将軍と呼ばれましたが日清戦争後相場に失敗して全財産を失いました。35歳の時アメリカに渡りましたがアメリカを放浪の末約3年間滞在、帰国後再度相場師となりますがうまくいかず妻を頼って別府を訪れました。別府では1911年に「旅人を懇ろにせよ」という言葉のサービス精神を実践して亀の井旅館を創業、また1921年に由布院金鱗湖畔に賓客をもてなすための亀の井別荘を建て自身の片腕中谷巳次郎に託しました。その後洋式ホテル亀の井ホテルを開業し、1928年に亀の井自動車を設立、日本初の女性バスガイドによる案内付きの定期観光バスの運行を開始しました。「山は富士　海は瀬戸内　湯は別府」というフレーズを考案しこのフレーズを刻んだ標柱を富士山山頂に立てたのをはじめ全国各地に立てて回り別府を大いに宣伝しました。大阪と別府を結ぶ定期航路汽船の大阪商船と掛け合い、汽船が接岸できる専用の桟橋の実現に尽力しました。自動車の発展を見越して現在の九州横断道路やまなみハイウェイを提唱しました。温泉マークを別府温泉のシンボルマークとして愛用しました。油屋熊八を別府の人は大恩人と慕い別府公園に功績を示す石碑が建っていますが、別府駅前に熊八のユーモラスなブロンズ像が建てられています。これほどの業績を上げた人でありながら愛媛県人は油屋熊八のことを余り知らないようです。

わが国の温泉と愛媛・道後温泉

さてわが国には温泉の源泉がどれほどあって温泉地と名乗る地域がどれくらいあるかご存じでしょうか。諸説ありますが令和5年3月時点で日本の源泉は2792ヶ所あり、温泉地数は2857ヶ所存在しており、その数は世界一位を誇っていて、私たち庶民はほんのごく一部の温泉しか知らないのです。古代から現代まで人々は温泉に入って心身をリフレッシュさせたり、病気を治療したりしていたようで、戦後農業中心だった日本の庶民は秋の取入れが終わると湯治場として温泉を利用する程度でしたが、高度成長による団体旅行先として温泉ブームが起こりました。その後旅の目的が団体から個人に変わりインターネットの普及や健康志向もあって温泉地が見直されています。県別では北海道が234ヶ所でダントツに多く、ついで長野県197ヶ所、新潟県144ヶ所、福島県132ヶ所、青森県127ヶ所の順になっています。

その３０００ヶ所に近い温泉地を利用客による人気投票や様々なアンケートによって温泉に順位をつけたり、人気の宿が紹介されていますが、「にっぽんの温泉１００選」は観光新聞社が実施し「温泉好きなら一度は訪れたい日本の名湯中の名湯」を選び発表をしています。1位は草津温泉(群馬)、2位道後温泉(愛媛)、3位下呂温泉(岐阜)、4位別府八湯(大分)、5位有馬温泉(兵庫)、6位登別温泉(北海道)、7位指宿温泉(鹿児島)、8位黒川温泉(熊本)、9位城崎温泉(兵庫)、10位箱根温泉(神奈川)となってわが愛媛県からは長い歴史と文化に育まれた道後温泉が選ばれています。松山にある道後温泉が選ばれた理由は沢山あり過ぎて全てを紹介できないほどですが、日本で最も古い歴史のある温泉であり、神話時代からの開湯伝説を持つ日本三古湯の一つで小説坊ちゃんにも登場します。日本最古の温泉として３０００年もの歴史があり、驚くことに「日本書紀」にも記述がみられ、聖徳太子も病気療養で訪れたようです。シンボル的存在の道後温泉本館は１８９４年に公衆浴場として建設された木造三層楼の荘厳な外観が美しく重要文化財にも指定されています。明治の面影をそのまま残す館内には神の湯と霊の湯の2種類があり雰囲気を楽しみながら入浴を楽しむことができます。近くには道後温泉別館飛鳥乃湯やカラフルで可愛い坊ちゃんカラクリ時計や市内では坊ちゃん列車も走っています。また俳句で有名な正岡子規の産まれたところであり俳句甲子園なども開かれる俳句の盛んな街でもあります。さらには街の中心に松山城が聳え古くから計画的のまちづくりが行われた歴史が息づいています。

～温泉文化を核とする新たな形～とは

私たちが「温泉とまちづくり～温泉文化を核とする新たな形～」を考える場合、温泉を手に入れるには適地を求めてボーリング調査から始めなければなりません。ひところ県内でも温泉ブームが起こり行政による先行投資が行われてきましたが、莫大な費用を掛けた割には投資効果が薄く財政難から更なる投資も出来にくく、その運営に四苦八苦といったところのようで、せっかく手に入れてもその運営となるとこれまたすそ野が広過ぎて手が出せない状況が続いているようです。新型コロナの感染拡大で冷え込んだ温泉ブームでしたがコロナの鎮静化と五類引き下げで次第に息を吹き返し、インバウンド効果もあってかつての賑わいが戻りつつあるものの、今度は国際化に対応したり人手不足という新たな問題が起こっています。道後温泉、鈍川温泉、本谷温泉という伊予三湯から始まった愛媛県内の温泉もスーパー銭湯も含めて少し広がりを示してきましたが、「温泉文化を核とする新たな形」となると私には想像もつかないようです。それにしても昭和初期の貧しい時代に温泉に着目し、観光地の売り出しや開発には公費の支出が当たり前の現代とは違い、別府温泉の宣伝は全て熊八故人の私財や借財で賄われ、様々な夢を実現させた油屋熊八の独創的な先見性や行動力にはただただ驚くばかりで、沢山のヒントが隠されているようです。

「山は富士　海は瀬戸内　湯は別府
海ならそばに　あるにはあるが」
「熊八が　伊予の宇和島　生まれとは
ほら吹き故に　昔の話」
「愛媛です　松山近くと　言ったけど
道後温泉　やっと通じる」
「三千も　あるのに私　温泉に　入った記憶
数えるほどに」

（若松進一の笑売啖呵）